

膵臓がん・胆道がんを知ろう

がん社会 を診る

中川 恵一

全国のがん専門医療機関32施設が加盟する「全国がんセンター協議会」によると、2013年にがんと診断された人全体の「5年相対生存率」は69・2%でした。

相対生存率は、あるがんと診断された人のうち5年後に生存している人の割合が、日本人全体で5年後に生存している人の割合に比べてどのくらい低いかを示します。がん以外の死亡の影響を除外できません。臓器別では、前立腺がんでは100%。甲状腺がん

は95・4%、乳がんでも93・5%と、9割を超えました。一方、膵臓(すいぞう)がんの5年生存率は12・2%と最も難治性でした。胆道がん(肝臓から十二指腸までの胆汁の通り道の胆道にできるがんの総称)も28・3%と主要ながんのなかでは、膵臓がんに次いで低くなっています。さらに、2つのがんの10年相対生存率はそれぞれ、6・8%、19・1%と、5年生存率からさらに低くなります。



イラスト 中村 久美

とくに、膵臓がんは近年増加傾向にあり、毎年3万人以上の方が亡くなっています。死亡数はこの50年で8倍以上に増加しています。

膵臓がん急増の背景には、高齢化の他、糖尿病の増加も関係していると思います。糖尿病になるとがん全体のリスクは2割も高まります。とくに、膵臓がんの場合は、影響が大きく、発症リスクは約2倍に跳ね上がります。

国内の糖尿病の有病者と予備軍は、いずれも約1000万人と膨大です。95%以上が、遺伝的な要因を持つ人に、肥満や運動不足、ストレスなどが加わることで発症する「2型糖尿病」です。このタイプは血糖値を下げるインスリンの分泌不良、あるいは、その効果が出にくくなる「インスリン抵抗性」が原因です。インスリンには、がん細胞

の増殖を促す作用があるため、インスリン抵抗性によって「高インスリン血症」が進むとがんのリスクが高くなると考えられます。糖尿病の他、喫煙、大量飲酒、家族歴、慢性肺炎、膵のう胞なども膵臓がんのリスクを高めます。

膵臓がんの5年生存率が1割程度なのは、早期発見が難しく、進行が早いという特徴にあります。年1回の検診では間に合わないこともあります。大量飲酒でリスクが高い私は年に2回は超音波検査を受けるようにしています。

膵臓・胆道がんについて知る機会があります。東大病院の専門医らによる、がんプロ市民公開講座「胆道がん・膵がんの最新情報 早期診断からゲノム医療まで」をお勧めします。2022年1月22日(土)午後2〜4時、オンラインで開催します。詳細や申し込みは以下のURL (<https://ws.formz.net/gen/S98559243/>)までお願いします。(東京大学特任教授)